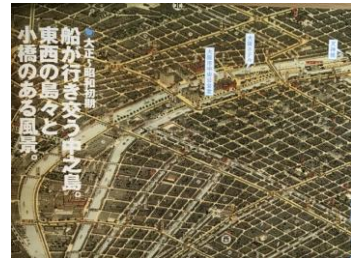


「水都大阪」と中之島界わい

昔から地図をずっと眺めるのが好きだ。中之島の「街事情」マガジン『島民』134号に大阪の古地図が掲載されていたので紹介したい。

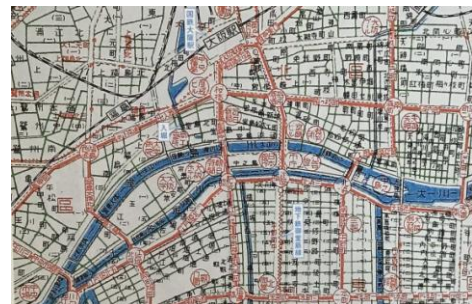
現在の中之島は、いうまでもなく「水都おおさか」の顔である。川面に映る近代建築とミュージアムの数々は、大阪を代表する水辺のイメージだ。写真は、大正13年(1924)発行の「大阪市パノラマ地図」の中之島。中之島公園の花壇と歩道の並木、居並ぶ名建築、連なる名物橋など、リアルに再現されたモダン大阪の姿に目が奪われるが、注目してほしいのは船である。中之島の北を流れる堂島川、南の土佐堀川。それぞれの川筋を目でゆっくりなぞっていく。すると、次々現れる大小さまざまな船、船、船。



次の写真は、昭和4年(1929)発行の「最新大大阪市街全図」。天満橋の上流に備前島が見える。大阪城の西北の砂州で、江戸時代の地図にも載っている。天満橋の下をくぐって延びているのは将基島。洪水を防ぐために設けられた堤で、明治初期にオランダ式の治水工法が施され、日本における近代的河川工事の発祥の地とされた。大川は毛馬の閘門から中之島東端までの流れの呼び名として親しまれてきた。中之島の東端が天神橋を越えて長く延びているのにも注目。大川の名で示された流れの範囲も、中之島の伸張とともに変化した。中之島の川は生きている。



中之島から大阪駅へは船で行く。今では考えられない話だが、かつては堂島川から大阪駅の構内まで入堀が深く延び、水運の動脈になっていた。昭和13年(1938)頃発行の「大阪市観光案内図」を見ると、よくわかる。



朝日新聞社、大阪ホテルの北側、堂島川北岸の商工会議所沿いに、鮮やかな青色で入堀が描かれている。東に国鉄の大阪駅、梅田貨物駅があり、入堀と駅が一体化して機能していたのだ。現在の大阪駅北側のシンボルゾーン、グランフロント大阪の周辺は、水を満々とたたえた入堀だった。

大阪駅の入堀が出船・入船で活況を見せたのは、戦前から戦中にかけての時代である。全国から鉄道で送られてきた物資が、大阪駅で船に積まれ、中之島を通過して大阪港から主に東アジアに出荷された。海外からの物資は逆のルートで大阪駅に運ばれた。

(2021年1月15日)